

# 教科書だけど読んでもらいたいたい本

田所 金久

先日、進学の名門灘中学が、中学の歴史の教科書に「株式会社学び舎」の「ともに学ぶ人間の歴史」を採択していることに対し右よりの人々から組織的な抗議と脅迫があったとマスコミが報じた。これについて、いくつかのテレビ番組に出ている著名な予備校講師林先生が、この抗議に対して静かにききっぱりと拒否した校長に「立派で感動している」「この教科書は多くの国内で有名な進学校が採用している、その理由は従軍慰安婦に触れているからだけでなく、薄っぺらではなく詳しく素晴らしいからである」と語っていた。一般に市販されているので、私もアマゾンを利用して、教科書(3456円) 解説的な「増補版」(2592円)を併せたものを購入した。一読してこんなに素晴らしい歴史を学ぶ本が出版され、厳しくなった検定を突破し教科書として広がり始めていくかと驚いた。すこしでも人間の歴史に関するある人には絶対に読んでほしいと思っただけ紹介したいと思います。

**様式と普及**  
この教科書はA4版322ページの分厚いもので、1時間の授業を想定した見開き2ページの様式である。見開きページの左上に大きな図版を載せ、その下にテーマの見出しを大きな活字で記載。続いて導入部分として地の色を薄青色に変えて具体的な事例をコラムとして記述、そして本文となる。多くの教科書が重要語句を太字(ゴシック体)で表示が、それではその部分だけを覚えればよいという暗記モノになるの、子供が考えることにならないから採用していない。全体は120テーマからなり、そのうち64のテーマが近現代史となっている。2017年4月検定に合格したこの教科書は新規参入が困難な現状において、368校5300名の中学生に届けられた。

**(2) 現職・元職の教員たちが会社まで作ってこの教科書をつくった動機**  
歴史教科書は、家永訴訟以来、戦争の被害・加害や植民地支配の問題が検定でどこまで認められるかが焦点となり続けた。それが教育行政の反動化の新しい歴史教科書を創る会「を源流とした「育陽社」「自由社」などの歴史修正主義の教科書が誕生してきたが、「学び舎」のこの本はそれに対抗しようとするものではな

く、あくまで子供の側に立ち、子供を意識した教科書を作ろうとしたものである。この「ともに学ぶ人間の歴史」に込められたものは次のようなものである。

- 1 ワクワク、どきどき歴史と出合い、歴史を学ぶ楽しさを広める
- 2 時代に生きる人々の姿を読み取る
- 3 民衆の声を、たたかいて、いきいきととらえる
- 4 歴史の中の女性と子どもに光を当てる
- 5 文化を生み出した願いや感動に思いをはせる
- 6 東アジアから、世界からの目を見る
- 7 戦争の現実を見る、平和を考える
- 8 主権者として、現代の課題に向き合う。

**(3) 学び舎の問い**  
歴史教育はどうあるべきか  
1 教科書を現場(現・元教師)が編纂する  
2 ジェンダー史、女性と子供の登場、子供の目線で学習を進める  
3 戦後を問い直す・・・侵略の負の遺産・戦後補償を考える 日中関係と東アジアからの視点  
4 各時代を生き抜いた、名もしれぬ人々への共感を  
5 教科書を「使い倒したくなる」「使い倒さねばならない」教科書をつくる  
この教科書は、我々一般市

# 一歩二歩ヨチヨチと

笹岡富美

退職して早くも5年。8月には65歳となり、めでたく(?)長寿手帳が届いた。退職する少し前から頸椎ヘルニアの悪化による諸症状に悩まされている。血圧の急上昇、動悸、肩首こり、不眠、頭痛などが続き、なんとか退職までこぎつけることができたが、今だに本調子とは言えない状況である。元気で活動、活躍されている年配の方々や同年代の人たちをみるとこんなはずではなかったと気がめいることもあるが、現実を受け入れ、やれないことを嘆くより、やれることを少しずつやるうと気持ちを引きかえることにした。新婦人の活動や医療生協の活動をはじめ、近所の人たち数名と公民館で月2回の体操、ほぼ毎日のウォーキングを何とか続けることができています。発症し始めたころは寝ても起きもいられず家の中でウロウロ歩き回ることもあったが、リハビリや民間療法などを続け、ずいぶん良くなりつつある。ボケないようには手を動かそうとクレパス画を描いたり、リサイクルショップで真っ赤な電子ピアノを買って、ピアノを習い始めたりして調子の良いときは気分転換を図ったりしている。

# 趣味悠々

子どもたちは皆独立し、東京の長女、沖縄の次女のところに出産手伝いや孫の面倒を見に行ったりして、1年のうち1~2か月は高知を留守にしている。90歳を迎えようとしている母は8月から入院している。現在は3か所目の病院で入院生活を続けているが、要介護2なので入れる施設がなく困惑している。昨年10月と11月に生まれた孫たちはヨチヨチ歩きを始めたが、足腰の弱った母はヨチヨチしか歩けなくなっている。この歳になったからだと思うが、孫たちのこれからの人生と母のこれまでの人生とを重ね思う時、感慨深いものがある。

私は農村地域であるこの地に住んで34年になるうとしている。ウォーキングの途中で野菜や手作りの品をもらうことも多い。ここにも、少子高齢化は目にみえて大きな影響を及ぼしている。先祖代々受け継いできた農地は後継者もいなく荒れ始めている。汗水垂らして支えてきた日本の農業の行く末はどうなるのだろうかと嘆く声をあちこちで耳にする。「瑞穂の国はどこへいった」と腹立たしい限りである。

『一歩二歩  
立ち止まる母  
歩む孫』  
『夏草や  
瑞穂の国は  
どこへやら』



さて、2018年のお正月も羽を伸ばしに故郷へ。娘もニワトリの餌やりや卵取りを楽しみにして日常から解放され、自分分をとりもどしてきます。田舎の良さ、見直す時です。

教師の多忙化が言われ、一向に改善されないまま、学力の向上、学習指導要領の改訂、英語の教科書など求められることは次々増えてきます。先生方は今でも十分努力をしていますが、今ではないでしょうか。それでも学力を上げると言っているのなら、先生を増やさないといけません。

1人の先生が2つの学年を教える時、子どもが先生と関わる時間は半分になるので、その分学力が落ちるといって理屈はあります。作業や計算が早く終わって、ポーンとして先生がこっちは向くのを待っていたことがありました。しかし、学力は人並みにつけてもらったと感謝しています。

私の父は保守派の町会議員でしたが「地域がなくなる」と反対しました。複式だと学力がつかないという意見に対して、「娘を4人育てたが、先生の指導でしっかり学力をつけてもらった」と反論しました。

民が「歴史を学びなおす」学習会のテキストとして最適です。一読し、楽しんでみませんか。

いこの風にかかれて④  
**先生を増やす**  
山崎 きよ